

岩崎純一歌集	『新純皇余情和歌集』>春の部					
歌集名読み	しんじゆんせいよせいわかしふ					
作者	岩崎純一					
通釈・語釈	園井長光、長光たき、戸井留子、武田あさあ、蝶子、沙月式部、雪実少納言、岩崎純一(自釈)					
作者サイト	http://iwasakijunichi.net/					
和歌ページトップ	http://iwasakijunichi.net/waka/					
目録日	春の題	歌 岩崎純一歌	通釈	語釈	他歌人欄(評)	他歌人欄(派生歌など)
2008/4/4	梅	人はいさ心知らねど色も香もいづらは花のかはるならひは	さあ、人は知らないけれど、花のように色も香も変わってしまうという心は、全くそうではないではないか。私の心は変わらない。	◇参照 「人はいさ心も知らずふるさととは花ぞ昔の香ににほひける」(貫之『古今』)		
2008/4/5	梅	ふるさとのもかしの香てふ梅の花見る人心さらぬものかは	故郷の昔のままの香りという梅の花を見る人の心も、そうでないことがあるか。昔のままだと思いたい。	◇参照 「人はいさ心も知らずふるさととは花ぞ昔の香ににほひける」(貫之『古今』)		
2008/4/5	梅中春月	梅か香の寝覚めの袖のくれなゐに霞みてまがふ春の月影	梅の香りがして目覚めたら、その香りで紅に染まったような袖に落ちた涙に霞んで見えている春の月影。	◇参照 「風かよふ寝覚めの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢」(俊成女『新古今』)		
2008/4/5	花	赤らひく肌(はだ)麗(くは)し女(め)の色染みて細かに濃(すべ)す衣(きぬ)の花散る	赤らんでいる女の肌の色が染みている着物を細やかな動きで滑らせ脱ぐように、細やかな桜の花が散る。	◇序詞 「赤らひく～衣の」		
2008/4/17	花	春雨は増さる緑に残る花色を限りと深めあらそふ	春雨は、深く増さってくる緑の葉に対して、そこに残っている、この春最後の桜の花を染めて、その色の深さを周りの緑と争う。			
2008/4/17	春霞	春霞おほろ緑のながめにも晴るかす花を避けてたなびく	ほんやりとした一面の緑を眺めつつ物思いし、長雨が降る中、春霞は、その心を晴らすように、今は春だからと花を咲かせ、花を避けつつたなびいてくれる。	◇枕詞 「春霞一おほ」 ◇掛詞 「眺め×長雨」		
2008/4/19	葦	夕されば葦の若葉のはるべにも風添ふ水の緑たゆたふ	夕方になると、葦の若葉が張る春の日の、その若葉の辺りにも風が加わって、その風にゆらゆらと揺れて見える水の緑色、若葉の映る緑色である。	◇掛詞 「春へ×張る辺」		
2008/4/24	春曙	答へねば夜こそ花の色を知らね青だに深き春のあけぼの	桜は答えてくれないので、夜の色は見えずに知らぬが、青色でさえ深く、ましてや桜色はより深いであろう春の夜の、その明け方である。			
2008/4/30	椿	春雨の椿つまびくしらべにもほ色添ふる風ぞそよ吹く	春雨が爪弾いている椿の花の調べ、その白色や紅色にも、いっそう色を添える春の風がそよそよと吹いている。			
2008/5/5	鶯	土分くる深き萌黄の若草の色染みうつるうぐひすのこ	土を分けて生きている深い萌黄の若草の色が染み移り、その萌黄色になっている鶯の声である。	◇掛詞 「雁の音×仮の寝」 「あまた×天」		
2008/5/5	帰雁	思ひ置ける心あまたを行く雁の音にも残れる春のかなしさ	未練を残して空を帰ってゆく雁の鳴く声にも、うたた寝をしている自分の中にも、春の何とも言えぬ情趣が残っているのである。			
2008/5/25	山吹	ひとへだに色の限りをかき集めてまばゆく咲ける山吹	八重でなく一重の山吹でも、あらん限りの色をかき集めてきて、まばゆく咲いている。	◇掛詞 「眺め×長雨」 ◇枕詞 「藤波の一思ひまつはり」		
2008/5/25	藤	藤波の思ひまつはり袖濡れてしたる花を眺め暮らしつ	枝がしたれている藤の花の藤波のように、思いが離れず、袖が涙で濡れて、その藤の花を眺めつつ、長雨の中で暮らしてきた。			
2008/5/26	春時雨	深緑積む春の夜のつれづれに月影うつる袖も時雨(しぐ)る	深緑色を増してゆく春の夜のしみじみとした情趣の中で、袖に春時雨が降り、涙も落ち、月の姿が映っている。			
2008/5/26	遊糸	紅(くれなゐ)の夕日のさかひおぼろにて数見えぬ色に遊ぶいとゆふ	紅の夕日の際もほんやりとしていて、その夕日に照らされて数えきれないほどの色を見せている陽炎である。			
2008/5/26	菜の花	挿頭(かざし)戯(さ)れ乙女らまがへ咲き渡る揺(ゆ)ら菜の花春風ぞ吹く	菜の花を髪に挿して戯れている乙女たちを紛らわすように、一面の菜の花を揺らして春風が吹いている。			
2008/5/27	菫	春の野に摘みし菫をなつかしみ何心(なにごころ)なく名づけたるかな	春の野に出て摘んだ菫が美しいので、思わず無邪気にも名前を付けてしまったよ。	◇本歌取 「春の野に菫摘みにと来しわれそ野をなつかしき一夜寝にける」(山部赤人『万葉』)		
2008/5/27	蓬	蓬摘むその色となき四方山(よもやま)の事ぞさびしき春の心は	蓬を摘んでいるあちこちの山。その、今自分が見ている風景の、どの色ということではないのだが、何となく色々なことが寂しいと思われてしまう、春の心よ。	◇掛詞 「蓬摘む四方山×四方山の事」		
2009/2/1	梅	今年また梅の実空になれ果ててなくさめ分くる袖の移	今年もまた、梅の実が熟れて、香りは空高くなしみ広がり、我が袖にも移って、心の慰めを分け	◇掛詞 「熟れ×慣れ」		
2009/2/17	梅	夢に見る空もこの頃霞むかな床までとほる梅のにほひに	夢に見る空まで、この頃は霞んでいる。我が寝床にまで通ってくる庭の梅の匂いに。		◆梅の香を夢幻の世界にまで浸み透らせた一首 縹渺たる美に、新古今の歌人が甦ったかと驚き (水垣久) ◆縹渺美の世界。「とほる」は一見奇抜だが、「ツーン」と通る濃厚な梅の香のイメージでも良いのだろう。そう取れば、縹渺と濃艶の間を行く歌だろう。(長満たき)	
2009/2/17	立春	春立つと聞きて覚めけむ佐保姫や霞の衣の今朝の山	立春が来たと聞いて、佐保姫も目覚めたのだらう。今朝、山裾は着物のような霞を着ている。			
2009/2/19	残雪	残り雪むら消えそめし若草に今年は何の彩を描かん	今年の残り雪は、若草の上で自らをとこところ解かしながら、何の模様を描くであろうか。	◇参照 「うすぐき野辺の緑の若草にあとまで見ゆる雪のむら消え」(宮内卿)		
2009/2/19	椿	落椿(おちつばき)水脈(み)をさへにほふくれなゐは盃に似て浮かぶ九重(このへ)	川に落ちた紅色の八重椿の花は、水の流れまで紅色に染めている。まるで九重の盃のようである。いにしえの宮中の宴のようでもある。	◇掛詞 「九重(多重×宮中)」 ◇対句 「(八重)//九重」	◆草が盛りを迎える頃の、春の野の微妙な色合いの美しさ (水垣久) ◆宮内卿の「あと」を「彩」としたところに、鋭く繊細な観察眼を見る思いがする。(長満たき) ◆川を流れてゆく落椿に、曲水に流した盃を幻想 ◆重なり合うように流れる紅の椿が濃艶な趣	
2009/3/15	余寒	大空は雪の別れの色ながら梅が香寒き風のきさらぎ	大空は、雪の冬との別れをほのめかしつつも、風に乗る梅の香りはまだ寒い二月である。	◇掛詞 「如月×来」 ◇参照 「大空は梅のにほひに霞みつつ曇りも果てぬ春の夜の月」(定)	◆「着更衣」への連想 (水垣久)	
2009/3/15	若草	春若くまづ咲き出づるみどりまた草てふ名負ふ花にやあるらん	春になると最初に出てくる若草は、実は「草」という名を持って咲き出してくる花ではないだろうか。		◆「草てふ名負ふ花」と言いなしたのはお見事 ◆家隆の「花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草のはるを見せばや」	

2009/4/16	暁日	暮れがたき春日を見れば君が代の心やすくも長くもがもな	日が長くなり、暮れにくくなってきた春の日を見ては、あなたの御寿命も何の心配もなく長くあつてほしいと思います。	◇枕詞「君が代の一なが」	◆春の日ののどけさと「君が代」の平穩を祝う心 (水垣久)
2009/4/16	春山	白妙の色はかはず横雲の別るひまの花の峰々	春になり、分かれてゆく横雲の間から、山の峰々の桜が現れてくる。冬の雪と変わらない真っ白な美である。	◇枕詞「白妙の一雲」 ◇参照「春の夜の夢の浮き橋とだえてして峰に分かる横雲の空」	◆幾すじか棚引く横雲が前方にあって、その「ひま」が広がるままに「花の峰々」が見えてくる、という状況 ◆着想の妙 (水垣久)
2009/4/16	春野	春の野に袖より下の花を見てひとひ挿頭(かざし)の雪を忘れぬ	春の野で一日中、自分の袖より下あたりの可愛い草花を眺めるばかりで、頭上に咲く桜の花をすっかり忘れていた。雪のように花びらが降ってくるまでは。	◇「挿頭草」「花の雪」:桜	◆初春を迎え、老いを意識し始めた人も、萌え出づる野に遊び暮らす一日に憂いを忘れる (水垣久) ◆「挿頭の雪」を白髪と見て、無邪気に遊
2009/4/29	桜	昔よりなほ白雲にまがふかな八重立つ染井吉野の色は	幾重にも重なり咲く染井吉野は、かつては存在しなかった花だが、古歌の慣例の通り、やはり白雲に見紛える壮麗な色に咲いていることだ。	◇参照「桜花またちならぶ物ぞなき誰まがへけん峰の白雲」(定家) ◇参照「古今集」[仮名序]	
2009/4/29	春月	あやなしと今宵は言はじ花の香も色も臙に照らす春月	はつきり見えない春の朧月だからと言って、今宵はつまらないなどとは言えない。春の花々の色香をもすばらしく臙に照らしているから。		
2009/5/19	春雨	同じくはいつこに雨の宿りせん梅の花陰青柳の下(した)	どうせ春の雨宿りをするなら、どこでしょうか。梅の花の陰か。青柳の下か。	◇対句「梅の花陰//青柳の下」	◆対句のリズムがおのずと弾むような心 (水垣久)
2009/5/31	春夢	寢覚めをば何にゆだねん明日の夢梅のほひかうぐひすの声	この春の明日の朝は、夢の寢覚めを何にゆだねようか。梅の匂いか。鶯の声か。	◇対句「梅のほひ//うぐひすの声」	◆梅の香と鶯の声のいずれを春の寢覚めにふさわしいかと、前夜の就寝時に思い巡らすという趣向 ◆表現も洗練されて完成度が高い作品 (樂々) ◆春夢の歌の模範解答。(戸井留子)
2009/5/31	苗代	今年また何を唄はん夕暮れの苗代道を帰る早乙女	今年もまた、何の唄を唄いながら夕暮れの苗代道を帰ってゆくのだろう。田植えを終えた早乙女たちは。	◇参照「おのつから秋のあはれを身につけて帰る小坂の夕暮の歌」(定家)	◆労働などから解放された時、気の向くままに口吟まれる歌 (水垣久)
2009/6/19	蝶	ぬばたまの夜は明けぬれど黒揚羽(くろあげは)羽(は)に赤々と燈(ひ)もともしたり	灯火を灯すべき真っ暗な夜は明けたが、屋に飛ぶ黒揚羽蝶は、羽に灯火のような赤々とした模様を付けているよ。	◇枕詞「ぬばたまの一夜、黒」	
2009/7/20	山吹	道傍(みちばか)に山吹の色残さばや訪(と)ひ来ぬ人の我が身しるべに	明るく色山吹の花を道端に置いていこうか。私を訪れてくれない人が私の行方を知るべとして。	◇掛詞「我が身知る×導」	
2010/8/20	梅中春月	春の月曇りも果てぬにほひまで霞む夜空の梅が香を	霞む夜空に、曇りきらない春の月。同じく曇りきらない梅の香りを聞くことだ。		
2010/8/20	梅中春月	春霞月も臙に曇りつつ咲き白む梅ににほふ大空	春霞の中、月も臙に曇りつつ、白く咲く梅の匂いがただよう大空よ。		
2010/8/20	梅中春月	大空は曇りも果てず春の夜の月さへ霞むあはれ梅が香	春の夜の大空は曇りきらないが、月まで霞むほどの梅の香りただよう情趣よ。	◇参照「大空は梅のほひに霞みつつ曇りも果てぬ春の夜の月」(定)	
2010/8/20	梅中春月	春の夜や曇らぬほどに白梅のほひの霞大空に立つ	春の夜よ、曇りきらない程度に、白梅の匂いという霞が大空に立つことだ。		
2010/8/20	梅中春月	空はなほ曇らで霞む梅が香や春の臙にかをる月影	この春の空は、曇っているのではなく、梅の香りで臙に霞んでいるのだ。月影までも、香って霞りきらず大空は霞み、朧月が出ている。このすばらしい情趣を作っている梅の匂いに、誰が愚痴を言うであろうか。		
2010/8/20	梅中春月	春の夜の袖の色香を梅に見て曇りも果てず霞む臙	春の夜の袖の色香の出所を、我が身でなく、梅の花に見つけて、曇りきりはしないが、少し涙で霞む女の臙よ。		
2010/8/20	梅中春月	月影に袖を濡らさば春の夜の梅のほひに空霞む頃	涙の袖に月影を映すような風流な趣味を味わうなら、梅の匂いに空が霞む春の頃の夜である。		
2010/8/20	梅中春月	梅咲かばにほひに曇れ朧月袖宿る影の涙掬(かす)め	梅の花が咲いたら、その匂いでもっと曇れ、朧月よ。あなたの影が宿る我が袖の涙を掬め取り		
2010/8/20	梅中春月	霞みあへず月の色人ほの見える空と袖とに残る梅が	霞みきらない空に美しい月がほの見える、空にも袖にも梅の香りが残っている春よ。		
2011/8/21	揚羽蝶	朧月揚羽の涙照らしつつとまる黄色の夕間の空	朧月が、揚羽蝶の涙を照らしつつ、夕間の空に黄色くとどまっている情趣よ。		◆さすらひて遠く忍びし故里にたちかへる術も今はなければ (揚羽、唱和、「うたのわ」)
2012/1/7	朧月夜	おほなる桜月夜のいにしへよ奈良の果たての今のあいなさ	朧月が空に宿っていた奈良のいにしへの桜の夜よ。その後世の果てには、今の都会の興醒めな夜景があるのだ。		
2012/1/7	花	散るのみを花の限りと思ひけり朽ちて元よりなきがごとき夜	散る時ばかりが花の終焉かと思っていた。その先には、散った花が朽ちて、元より花など存在しなかったかのような、完全非在の境の夜があったのだ。	◇参照「萩の花くれぐれまでもありつるが月出でて見るになきがはかなさ」(源実朝)	◆花の証拠さえ消して詠んだ壮絶な一首。過去と現在との意図的な遮断のうちに、かえって過去への哀悼の念が深く込められている。(園井長光)
2012/9/23	春月	心までおほろに変はる中空に雁なきあとの春の月影	空も心も春の臙である。雁なき今、心を象徴する虚空に春の月影が宿っている。		
#####	暮春	朧月霞のうちに春落ちて花のあはひをゆく小舟(こぶね)かな	朧月夜の霞の奥へと春は暮れてゆき、水面に散り落ちた花卉の間を縫うように消えてゆく小舟よ。	◇参照「暮れてゆく春の湊は知らねども霞に落つる宇治の柴舟」(寂蓮「新古今」)	◆「春落ちて」、聞きつかず。「春落つ」とは如何な事よ。 ◆「春の湊」「霞に落つる」の歌を思はれは遺恨の事なり。柴の小舟は更なり、春の限り霞のうちに落つるが虚無なり。(園井長光)
2012/12/1	花	寂しさは冬ぞ限りと思ほえど花散る果てに胸霞むなり	年の一巡りの寂しさは冬で完結するかと思われたが、霞の中で桜の散る春の終焉にもまた、胸が霞むような寂しさがあった。		
2013/1/15	桜	桜花千歳の松をよそにして緑の上(うへ)ににほふ春風	常緑の松には見向きもしないかのように、緑の松葉の上を、桜の花が春風に見事なまでに散っ		